

『能海寛』 西藏探検行の源流を探る」

タイトル	『能海寛』 西藏探検行の源流を探る」
著者名	隅田正三
雑誌名	能海寛研究会機関誌 『石峰』
号	第 11 号
ページ	40－47
発行年	2006.2.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）浄運寺に生まれる。12歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出ず目的で当時鎖国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に『般若心經』西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

「能海寛」西蔵探検行の源流を探る

能海寛研究会会員 隅田正三

はじめに

能海寛は、自身の履歴書のメモ書きに、「明治14年以来18年まで在国父謙信より宗余乗及び漢籍教受」、「15年、16年、17年、18年及び22年の五夏、石見学場並びに講習場 縣席。(正信偈、和讃、本願抄、観無量寿経など)」と、このように記している。講習場とは、浜田市の明清寺、浄慶寺など6カ寺のことである。こうした中で、16年5月29日には第4級を卒業している。

父謙信は、大分県中津の照雲寺・松島善譲師に宗学を学んで、本山の布教師(教導補)の資格を持っていた。明治14年からの5年間に浄蓮寺の1,000余の蔵書を教材に寛は着実に基礎学力を付けたものと思われる。

そして、石見学場、講習場にて学ぶとき、明治16年に九州から高塚和上師が石見地方へ講和に来られ、寛は、高塚師に就いて学びたいと、この時思ったのであろう。早速、高塚師に伴って遊学に赴こうと発起するも障害が起こり、止む無く断念したという。その後も、檀家総代の石田喜三郎氏を通して、父謙信に遊学を頼むも、許しが下りなかったのである。結局、亡くなった父法幢師の里の専光寺住職・円海師の強い支援と石田氏等の計らいで、9月10日、「品行正しく勉勵すべし」と誓約し、父と檀家総代の了承を得て13日に再び広島で勉学する運びになるのである。

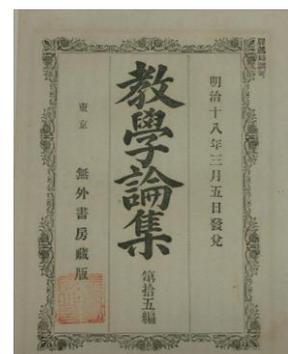
寛は、郷里にいて、無外書房刊行の『**教学論集**』第15編(明治18年3月5日発行)「佛涅槃年代考第二」南條文雄、明治13年の冬亡友笠原研壽と英国に渡りマックスミュラーに学ぶ、「印度文学雑誌第一」南條文雄、「世界成立説」島地黙雷、「仏教論評」石川舜台、「大日本国教論序」大内青巒など。『**教学論集**』第17編(明治18年5月5日発行)「印度文学雑誌第二」南條文雄、「天理人道」島地黙雷、「祈祷論(接続)」大内青巒、「佛教論評」石川舜台、「亜兒碧行」南條文雄など。

(注) 特に、南條師の論文で、明治17年5月太平洋船旅での帰国途上の韻詩。母の危篤で急遽アメリカ廻りで帰国した経緯がこの論文から理解できる。『**教学論集**』第18編(明治18年6月5日発行)「印度文学雑誌第二(基督教徒の梵語学問)」南條文雄、「哲学要領(第一段哲学緒論)」井上円了、「三篠辯疑」島地黙雷、「佛教論評(第四仏教の要旨)」石川舜台、「学教史論序」大内青巒、「所量亜兒碧行之韻寄懷老友小栗栖蓮舶」南條文雄など。

明治18年3月の時点で、故郷に在りながら『**教学論集**』を入手して購読していたことで、既に能海寛は南條文雄、井上円了、大内青巒、石川舜台、島地黙雷等の論文にも目を通していた。



能海寛の生家・浄蓮寺(明治時代)



京都・普通教校～文学寮のとき

後に記す明治19年10月23日にチベット行きを普通教校で南條博士等に発言したことは、1年6か月も以前に、南條博士の考え方を『教学論集』などで既に熟知しており、これらの知識は習得済みであったことが理解できる。しかも、ここに掲げる仏教関係者全員の先輩たちとその後、着実に交友関係をつくりあげていることでも理解ができるのである。

そうした中で、勉強したいという信念が実り、18年9月16日、漸く念願叶って、5年振りに再び広島普通教校へ入学したのである。普通教校では、高僧和讃、三国伝、通縁起、十八史略などを学んでいたが、12月20日の試験をもって閉校となり、京都の普通教校へ統合となった。このため12月31日、京都に住所を移し、桑門巖宅へ寄留して普通教校へ入学を待つことになった。

明治19年3月5日、京都普通教校へ無事に入学した。東寮3号室で、垣山清、蚊野僊次郎、小池智覚、能海寛が同室であった。持ち前の前向きな性格で、5月29日には、「反省有志会員」(第85号)に入会して禁酒運動に参加した。6月11日には、コレラが流行したため学校閉鎖となった。寛は一旦帰郷して、修学金の工面に奔走した。『能海寛学資金本寄付米受納帳』(注1)を見ると無事解決したことが判るのである。学校が再開となり、9月15日には、普通教校へ帰校する。10月10日、「反省会」へ誓約書を出し、永久会員として入会する。10月23日に、寛はチベット行きを公言した。この時、南條博士と学生たちがいる中での公言と思われるも、まだ、南條博士が当日、普通教校に来ていたという裏づけは取れていない。しかし、別な裏づけとして次の事実がある。それは、友人の蚊野僊次郎から「活眼」(注1)という書き物を貰っていることである。この「活眼」には、人の顔を描き、眼を大きく真ん丸く書き、「大日本帝国東山道滋賀縣淡路国愛知郡軽野村 蚊野僊次郎 干時明治拾有九年十月廿三日午後七時於西京普通教校西寮第二号室記之為□日備焉『活眼ヲ開テ、君ガ成業ヲ待ツ、勉ヨヤ勉ヨヤ』石見一傑土能海寛貴兄」としている。そして、南條博士が『能海寛遺稿』(大正6年刊)「能海寛君略伝」で「19年本願寺派の普通教校に入りて…君の西藏探検の志は已に此時より発起せり、…」と延べている。南條博士の記述のとおりとすると、このことからして、寛の西藏探検行の出発点は明治19年10月23日が、これに該当するものと判断される。

この普通教校を知るには、『普通教校人士』に目を通す必要がある。この本は、明治23年11月12日印刷で概要を記すと、「普通教校沿革記、普通教校人士、職員、教員などの情報を掲載。特に普通教校の沿革で、西山教校を設置後、明治17年8月に普通教校設置の原案が承認され、18年2月に開業され式典は4月18日に挙行された。明治19年1月より米国人チャレス、ヘンリー、ボールドウインの三氏を仏教学校に採用する。翌年より英国人セッパード氏夫妻英語教授となる。普通教校の精神は、『僧俗を問わず宗派を分かつたず遍く佛弟子を教育して広く同胞の主義を拡張せんとするに在り』明治21年12月、大学林の発布により12月25日に閉校となる。よって12月11日に知恩院門前にて同窓の記念撮影(総勢260名)を行う。」とある。

寛が明治29年6月8日より書き始めた、「手帳」によると、『得度、継席、教導職試補、住職。学術 16年5月29日第4級卒業、19年7月普通高等科文入学、20年3月依願退校、20年3月より小栗栖香頂師に師従して命経を学ぶ。…21年より3カ年哲学館館外員となり哲学について学ぶ。21年より2年間梵・英・蔵を学ぶ。同年同月より東京英学校にて英学を学ぶ。』とある。普通教校で学ぶ傍ら、小栗栖師からもチベット語を明治20年から学んでいたことは、やはり、前年の発言を即実行したものである。19年7月から

吉谷覚寿師に、20年1月から小永井小丹氏に、それぞれ、師従して相当量の勉強をこなしていたことが判ったのである。このことから、チベット探検に赴こうとする直向な寛の姿が見えてくるのである。

寛の「手帳」記録によると「明治20年普通教校大行軍日記 第大隊 第二中隊 第四小隊 左半小隊・・・」、「明治20年11月11日、午後1時出発、3時30分伏見着、5時エンパーク、5時30分出航(5銭5厘ミカン・カシ)12日、午前1時大阪着、六艘の内①第二着、教員役員②第四着一小隊③第一着、二小隊④第五着、三小隊⑤第三着、四小隊⑥第六着、予備。6時上陸茶屋にて朝ご飯直ちに御坊へ7時着。」、「明治21年4月14日から大行軍 奈良 吉野 和歌山 大阪等」と記している。これらの大行軍が探検への何らかの知識を深めたであろうと想像される。

明治20年12月27日には、普通教校の教授セパード夫妻を訪問して洋食をご馳走になっている。このことが、寛の外国人と付き合い上で何らかのヒントを得て慶応義塾での飛躍に繋がったものと思われる。

明治21年には、普通教校に学ぶ親友の東温讓がインドへ留学する際に、寛は送別会の席で入蔵の必要性の熱弁を述べたことがノート「予と西藏」(明治30年5月9日記)に書き記されている。こうしたことから、数年間でチベットに関する知識の習得が相当に進んでいたことを示すのである。

明治21年8月24日の記録に、「本山に必ず外国の書生をとめ、本国本山近辺に一つの洋館の学校を建て、仏教と普通学を□□□し、外国人の使布教をなすべし。教員は、外国人及び日本仏学家を。校長は、外国に於いても名ある如き日本人仏教者をすべし。」としている。大学林の設置で普通教校が21年12月を以て閉校されることで、普通教校内では学生運動が起こり大変揺らいでいた時期のことである。このことからして、寛は普通教校の設立の精神に則り、将来、自分が「佛教大学」を設立する構想を既に描いていたものと思える。

明治22年1月28日には、文学寮本科第二年甲生へ編入となり、「文学寮在学中豫備金」3円を納めている。寛は5月10日から故郷へ帰郷した。どうしても、大学林高等科を卒業したいという考えを持っていたからである。檀家一統と後継住職となる契約(「学資金募集ニ付訂約書」)を9月4日付けで結び、向こう4年半の学資金の支援(270円の確約)を得て再び上京した。9月14日には、大学林文学寮の北寮6号室へ移り、美濃国の久富米次郎、播磨国の村上寅吉、筑前国の西原莊十郎、阿波国の平尾一夫、能海寛の5名が同室となった。『春秋日記』によると、「9月22日河口(慧海師?)君と逢い「英文会」のことを一寸話す。」9月25日には、入寮前に写しおいた課業を月曜日から土曜日まで学科と教師名が詳しく記されアメリカ人のセッパード氏、ランバート氏などの名前もある。「春秋日記」9月26日、によると「英文会の為来土曜日会のこと語り、アジアの宝珠及び十二宗要綱を人をわけて翻訳日本文へ又英よりの手紙新聞等を日本に訳し之れを英文会の付属部とし本趣意は英文を訳して作文するにあり。」とある。もともと、寛が英文に力を入れようとした考え方は、『世界に於ける佛教徒』第十六章の「佛典翻訳」で理路整然と次のように述べている。「英国の布教に於いて、最も必要なるは佛典の翻訳なり。(中略)普及せる言語ら由りて、翻訳を始むべし。(中略)国語多き中、予は、その第一着は英文に訳するにある。(中略)全世界人口の十分の一以上に及び就中英国中屈指の強盛なる英米の語なれば、これ最も必要なり。オルコット氏の佛教問答の如き、英文を以て、成る故、已に十五、六カ国の文に訳せられたり。かくのごとく、一度仏典も英文に訳せられるときは日ならずして、又諸国の語に訳せられるべし。」と世界5億の仏教徒の結束と世界宗教会議所の設置をと広大な考えをもっていたのである。このためにも、仏教を訳すには梵学と英学の二つに精通す

べきとも述べている。目標たっせいのために、周到に語学に勤しんだのである。

10月14日には、「英文会一周年日」と記述していることから、明治21年10月14日には、既に英文会を結成して主宰していたことと思われる。次々と友人たちは、東京の大学をめざして、上京する中で、「英文会」の組織維持に辛苦していたのであろう。

12月まで、寄留地の京都を離れることを制限されていた寛は、12月をもって文学寮本科2年級（英学、普通学を学ぶ）を修了して、東京へ向かった。

東京・慶応義塾のとき

明治23年1月13日に慶応義塾へ双書と履歴書を提出した。この日の日記に寛の請人は日本橋区小網町の豊島勝太郎氏であると記している。慶応義塾の入社帳にも、保証人として記載されている。

舞台は東京に移り、「英文会」の同志である英文会会員は、「平山、竹下、綿谷、坂山、清谷、梅田、笠原、橋、宮、川口、堀、上田、荒木、後藤、吉田、加藤、島津、久富、橋本」と記録している。能海を含めて総勢20名となった。1月29日、「英文をもって主義とす。」と日記に書き、「Wisdm and Mercy」No. 1stを作り、主義を述べんとする。この日から英文会の「英字雑誌」の立ち上げの構想があったと考えられる。

『春秋日記』によると、2月19日、「E. アーノルド（英国人・詩人）が令嬢と共に福沢諭吉先生等数名と連れ立って来校する。」、2月24日、「初めてWestonという英国人と種々話したりき。」W・ウエストンと富士山登山のことなども会話しただろうか。2月25日、「英作、エドウィンに付 亜細亜の宝珠に付考へ」と記している。このことは、次の日曜日にアーノルド宅を訪問する機運がこのとき浮かんだのであろうか。アーノルドの飯倉の自宅を3月30日（2回目）の訪問時には、アーノルドから漢詩の英文の紙一枚を寛が戴き、裏面に、「英国大詩人アーノルド伯日本渡来東京滞在の節予も在京中にて飯倉之寓居を訪ひ数語之後天下和順之経文英訳を示しこの時に於いてこの詩を直ちに作り予に与えへらるるものなり伯の直筆にて有難き物にり」能海寛識と書き残している。2月28日、「物理クライブ音読」W. ウエストンは郷里のダービシャー県の英字新聞を持って来て「追々日本も英字新聞を読むべし・・・」と語ったと記述している。これらの一連の日記には、福沢諭吉が西洋文化と英語力の高揚のために慶応義塾へ外国人の宣教師を登用していたものと考えられる。特に、2月には著名な外国人教師が慶応義塾に頻繁に出入している。

寛は、英文会の趣旨は、「日本の布教は郷国の僧侶を教化し時々巡回して布教し又郷村近村檀家の布教を充分になすを盛って英文会員の日本の布教とす。」「世界の布教は各国普通語なる英語をもちて佛書を訳し或いは説明して教典雑誌新聞にて布教することをこれ英文会員の本职とす。但し自ら外国に出て布教するは勝手たるべし。」と記している。また、「E. C. S」という略称で記録している。

E. C. S Purposes

1 Transaction. 2 Correspondence. 3 Magazine or News.

4 Four igne Culture. 5 College of 1. 2. 3. and 4.

と英文会の目的？を記している。手帳メモのよると、「智恵及慈悲(ちえとじひ) wisdom and mecy 智恵に二種あり、世智と出世智也」と英文雑誌の発行の原点を記している。また将来構想とともれる「大同圏の是非、□来本□□、□宗協同如何、未ち論、教会の布教論、政治及政府、宗教及本山の関係、教育論＝宗教家、新聞雑誌＝宗教論、非□権論、僧族是非如何、佛教と他宗

教、宗教と人間の関係、佛教大志、真宗組織論。」と取り組むべき方向性が見えてくる。

明治23年2月10日には、「予学成就の上は仏教大学を設立し諸業合同にして南條文雄君を校長に命じ文学科を置く選科を置きて佛学専門となす生徒は僧俗を撰ばず資本は本山及び仏徒とす。」既に、21年8月に構想していたことが、南條博士を校長に迎えるということで、一歩構想が進んでいる様子が見られる。

7月には親鸞の聖地稲田の郷へ旅する「東北紀行」で、寛の手帳に「『旅行に付入費』麦帽50銭、メリヤス40銭、カバン70銭、手帳15銭。×1円75銭。」と旅の準備で購入した明細を記している。

11月5日には、自らはより英語力を高めるべく、入会金1円、授業料1円を払い、「英語夜学会」へ入会している。そのような中であって手帳記録には、「明治23年12月、試験を受け落第せば1月からは何更にか一年間教員をなし又24年12月に来り試験を受く、故に学問の予備はこの12月迄之」と、自問自答している。こんな時期に手帳に一行のみ、「桑門からの手紙如何哲学館に行く事」と記している。これは、実家から依頼された桑門志道氏が哲学館への転学を勧めたものと推測される。手帳の中に、「万寿寺西へ87番山陰道詰所」と書き桑門師の住所が「不明」と書いている。

哲学館のとき

明治24年1月より、哲学館へ転学した。元旦の記述を見ると「本年は純潔タレ、品行方正タレ、道德人ヲ感服セシムルニ至レ、学問学理大進栄タレ、故ニ勉強怠ル勿レ、精神正確タレ、気性活発タレ、疾病近ヨルナカレ、社界者タレ、高僧タレ、一大聖人タレ、文章家タレ、文学家タレ、記シテ歳暮ノ良果を期ス。」哲学館転学への意気込みと将来の方向性が定まってきたことを暗に記述したのであろう。彼の書き残した資料を眼のあたりにするとき知性に富んだ文章に触れるたび、普段の努力の様が伺えるのである。また、転学以降は、同時に南條文雄師にも師従して梵学も学んでいた。寛は、哲学館で人類学を学び西藏国研究に興味を覚えたと述べている。

1月13日には、郷里にいる最愛の妹すゑ(末子)が病死した。亡くなってから11日目の1月25日に、弟齋入からの手紙で知らされた。その後、半年ばかりは気持ちを引きずり、「無き人の 小袖を今や 土用ぼし」、「夏瘦せと 人に答えて 涙かな」と詠んでいる。7月になると、寛は、「富士山単身登山」を決行して、山頂で野宿をして尺人を吹いている様子を、「富士の嶺の 去りなき月も 見る人の ふく笛の音も いまは絶妙なる」と詠んでいる。この富士山頂で、亡き妹の悲しみを断ち切り、チベット行きの決意をはっきりと決めたのである。下山してからの寛のチベット研究が急に拍車がかかり、26年11月に自費出版された『世界に於ける佛教徒』が完成したのである。序文を担当したのは、大内青巒氏であった。東本願寺からチベット派遣僧としての任命を勝ち得た重要な論文であったことは申すまでも無いことである。チベット行きの布石になるものは何でも学ぼうとする姿勢が鮮明になってきた。10月6日には、「哲学研究会」へ第一期会員(「証票」第150号)として加入した。「海外宣教会」へも入会して活動した。

明治25年8月には、「伊豆七島めぐり」を実行したのであるが、中国での長江遡上の時の船旅の体験であったのだろうか。振り返れば、幼い頃から広島へ出て行くために加計(安芸太田町加計)の了川(よろがわ)の運河から太田川を下る川舟の旅を幾度も経験済みであった。26年7月には哲学館を無事卒業して、帰郷した。

フィールドワーク

明治27年1月3日には、寛はチベット行きを実行するために、先ず、「口代」と和とじ本に書き、17箇条にわたる遺書を書き綴った。翌2月27日には、自らの頭髪を切り、一握りほど、和紙に包み「口代」に添えて置いていた。この遺髪が帰らなかった寛の遺体として手厚く浄蓮寺の墓所に葬られているのである。

遺書も書き置いた寛は、チベット行きの嘆願のために本山へ上京中に日清開戦となり止む無く帰郷した。明治28年4月8日付け、三隅の岩本普満師から「急げば回れの古諺を容して・・・住職補任を望むならば速やかに住職に任じて後代理を命じご自由に遊歴を企て・・・」とアドバイスの手紙が届き、早速実行に移した。5月2日には本山へ整理献金をして寛は浄蓮寺餘間(院家)となり、父謙信を補佐して副住職を務めた。

明治28年5月5日には、故郷の若者を集めて「波佐倶楽部」を創立させ、自らは庶務を掌り地域の学習活動を根付かせた。中世・近世の郷土史年表の作成や儉約貯金の奨励も行った。そして、世界の地理などの共同研究を進めるために、集落単位で、諸外国を一国ずつ分担させて、その任に当たらせていた。いわば、国際化を先駆けるものであった。そして、友人の佐竹旻氏はアメリカへ、春谷登氏はハワイの本山別院へ、自らはチベットへと旅立つことへと触発をしていたのである。

また、チベット行きのエネルギー発散の場所を益田沖の高嶋にもとめ、7月から高嶋へ渡って「寺小屋」を開いた。正に、離島での僻地教育の実践であった。島民への土産は酒2升と子供たちへはお菓子5個ずつ持参したと記している。島民の子供たちを集めて体操を教えた。夜は島民へ説教をしたことなどが記録されている。『能海寛遺稿』p239の南條博士の談話として『元来大谷派の寺に生まれた人手あるが、明治22、23年頃本派の文学寮に在学して学生の傍ら体操の教授を受持っていたそうです。』とあることでも、寛が体操に造詣が深かったことがうなずけるのである。こうした国元での活動の中でも、友人たちからは、チベット行きが頓挫したことへの同情と再挑戦のための激励の手紙が沢山届いていたのである。



益田市沖の高島

用意周到のとき

翌29年3月1日には、南條博士からの誘いもあって再び上京し南條師宅へ寄留することとなった。南條師の元では、先生の書生を務める傍ら、梵学と西藏語を学び、善隣書院にて中国語を宮嶋大八氏から学んだ。そんな中で5月7日付けで、本山へ「嘆願書」を提出した。この嘆願書の写しを見ると、「嘆願」、「入蔵予定」、「履歴書」の3種類があり、「入蔵予定」を見ると、方法、順路、年限、目的、入費の5項目について詳細(注1)に述べている。

明治30年5月9日には、「西藏入蔵目的は仏教經典の原本を得るため」、「原本考究、歴史の探索は実地にすべきで、とくに釈尊正伝あるいは仏説を明らかにするためには仏教が減んだインドよりも、むしろチベットへ行くべきである。」と述べている。この30年5月から8月の4カ月の間に「予と西藏」など10本もの論文(注2)を書き上げ仏教関係雑誌に頻繁に寄稿していた。9月25日には、

一時帰国の途に着く。10月7日に、浜田港着。12月2日に再び上京する。この間の帰省目的が今ひとつはっきりとしないが、おそらくは、浄蓮寺の本山への上納金の工面のためであったと考えられる。明治12年以降の浄蓮寺の本山への上納金を調べてみると、明治12年本山再建費に500円、14年父謙信の院家資格(昇階)に250円、プラス寺格内陣で250円、21年相続講(再建費)に400円、26年兄法言の院家資格に280円、明治28年に寛の院家資格に120円、都合1,800円を納金している。寛のチベット行きには、先ず、住職(院家の資格)であることが望ましかったのだろう。これより別に、本山教学資金として350円の念出のために檀家説得などの応援に帰ったものであろう。約17年間で本山への上納金は2,150円であった。このことから、寛は、本山からの派遣僧としての嘆願にも自信をもって行えたと思われる。

明治30年に書き記した寛の「履歴書」によると「19年創立以来、京都反省雑誌。29年以来東京佛教雑誌、30年3月以来東京東洋哲学雑誌などに関係致し居り候」と書いている。反省会雑誌には当初から継続して関わりをもっていたようである。29年に上京以来仏教雑誌との関係で論文投稿も増えていったことが伺えるのである。

婚約期間

明治30年10月5日には、南條博士あてに郷里の母からの強い要請で寛は再度帰郷することになった。瀬戸内海から日本海に出て萩沖を經由して山陰の浜田港へ7日に到着する。父謙信の姪の佐々木静子と浜田で弟の登の仲立ちで見合いをさせられることになった。もともとは、静子は大阪の中学寮へ上京する折には手荷物などを運ばされていたので、顔見知りではあったが、中学寮を卒業し社会人となった静子と再会して意気投合して3人で深夜まで話し込んだ。浄蓮寺に帰ってから、三日にあげく静子に手紙をせさせと書いては出した。しかし、色よい返事が届かない。寛の作った歌に「冬の夜さむに門出てみれば 淋しき月がはたしをてらす 草木もこをる露夜の気しき じつとまことが身にしみはたる」(10月20日詠)、「見ても見たいが吉野の桜 そばにうえをき詠めたや」、「はかない此身は川ばたほたる 露のおかげで夜をあかす」、「紅葉踏み分せし鳴鹿の こがれ鳴声きかせたい」、「雪の下なる常葉の緑 色をかわさで春をまつ」(11月13日～14日詠)、この時点では、寛の一方通行の手紙であったと考えられる。寛の30年『使用日記』によると最初頃は、佐々木静子宛に手紙をだしても、「書出す」のみで、何のことかなと思われていたが、10月20日には、「浜田へ書面出す」と、少し鮮明になってきている。30日の日記には、「浜田より書面来」と記していることから静子からの承知した旨の良い返事がきたのであろう。寛の歌(韻文?)に「いづくともども行く水の 流れも清きせど川に うつるふたりのをもちがは たらすふたりのこころなり そらにかかれるおぼろ月」、「誰がかけさげしともし火の ほそぼそあかるうらざしき かたらふひまのみじか夜に こころのたけをといかたり すえのすえまでかえさじと ちぎりをむすぶ身の上は 朝顔日記のそれならむ 時節まつ外ぜひもなし」(12月4日詠)。この日に、静子へ書面を出し、一緒に上京することの打合せのことであったと思われる。6日には、浜田港から一人船で大阪へ向かった。14日に「大阪よりの書面見る」とあることから、大阪で、寛の上京を待っている旨の連絡と思われる。18日、「朝大阪及南條氏へ書面出す。午後3時出発」と書いている。22日に故郷を出発し寛は22日大阪梅田に着いて静子と出会い縁日へ散歩する。23日は京都に行き、24日には、石川舜台師に静子同伴で面会し、チベット派遣についての尽力を要請した。日記には「蔵行、梵書の出版、支那開教の約束、世界問題などの話しをなす。」と書いている。これまでの静子への手紙の中で、寛はチベット探検の志を熱く解いて聞かせたことであろう。全てを了解した上での快諾であっ

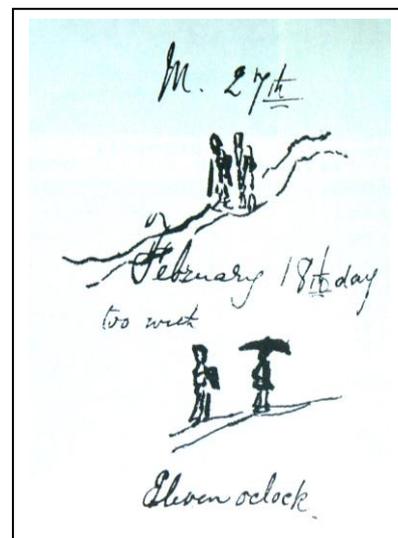
たと思われるからこそ石川舜台に引き合わせたのである。

25日の日記に、「午前7時58分発関ヶ原大雪、名古屋中食、午後5時静岡大東館に投宿。12時迄話す。ネズミ菓子を引くおもしろ事更になり」、寛の『阿里野まん満雲枕』(注1)の韻文に「ころゆたかに気も静岡の 大東館でたびまくら ふたつならべてねておれば こそこそひきたるあのねずみ 菓子をひきひきうたうには 今宵一夜は浦島の 明けてくやしき玉てばこ」、「つきづきに月をかがみとなかだてて うつらぬむねをうつしあいみん」、「ぬしのところとわたしのところ うつすかがみにうそはない」と詠んでいる。これらの記述を読んでいくと、純粹で喜怒哀楽の全てを表現できる寛の人間性という味わいというものに心引かれるものがある。

翌26日新宿駅に到着、互いに車を雇い東西に分かれての生活が始まった。寛は、南條博士宅へ、静子は井伊家へ住み込みとなり、以後、休日には、井の頭公園、忍ヶ池などで一緒に散歩などした。寛が書き残した半紙四分の一の大きさに墨筆で描いた二人のデートの二場面が印象的である。

「m. 27th」には、二人でピクニックにでも出かけたのであろうか。また、下半分に「February 18th day too week,

Eleven oclock」には、寛は尺八を吹き、静子は日傘を被っている姿が描かれている。半紙判半分には百人一首の恋歌が十首ばかり達筆で書き記されている。東京での婚約期間は度々会っており、とても幸せなひと時であったと考えられる。



探検出発のとき

明治30年2月6日、寛が結婚のため帰国を勧めに南條博士のもとへ母ユクノが上京した。おそらくは、母の上京のことで、2月18日、3月27日に静子と出会って結婚の事を話し合っていたのかもしれない。寛は5月13日に結婚する為に帰郷した。6月29日に浜田の明清寺において静子と目出度く結婚式を挙げる事ができた。チベット行きを阻むために結婚をさせた檀家の思いと、結婚すれば、チベット行きが叶うとする寛には大きく隔たりがあったものの、最愛の妻静子の包容力によって仲むつまじく新婚生活を送っていた矢先に、本山から西藏行きの許可が急きよ下りた。10月4日には、家族・檀家(門徒)一同に見送られ浄蓮寺を出発し西藏へと旅立った。県境まで妻静子も同伴した。これが永久の別れとなることは知るよしもなかった。京都では、渡航手続きや大谷法主からのダライ・ラマ13世宛ての親書を授かり、本山から渡航承認費用1,000円の内渡し資金を受け取り、11月12日、神戸港から西京丸に乗船して上海へ向かった。こうして長い間の念願が漸く叶いチベットに旅立った寛の、「不借身命」の中国巡礼探検(注1、2)がスタートを切ったのである。

今回は、「能海寛の探検行の源流を探る」ために、今までに判明している事実関係を述べるに留まったが、結論として、明治19年10月23日という日が重要な日時であることを再度発表することとしました。発起から実行までをかいつまんで記しましたが、誤った箇所など、お気づきの点のご指導方宜しく願います。

(注)

1. 拙書「チベット探検の先駆者『求道の師・能海寛』」(1989年・波佐文化協会刊)
2. 『とんぼ』所載 拙著「能海寛」の人と人生 (1999年・出帆新社刊)
3. 「まんが『西藏探検家・能海寛』」(2000年・波佐文化協会刊) 巻末付録ミニ評伝